

六朝時代における『維摩經』の研究講説

佐 藤 心 岳

一

佛教が中國において夥しい數量の漢譯佛典に基づいて著しい發展を

遂げたことは、すでによく知られている事實である。ところが、このように中國佛教發展の礎石としての役割を果たしたこれらの漢譯佛典が、中國においては實際に、いつ、いかなる地域に伝えられて、研究され講説されて、人びとの思想信仰を育んだかということになると、歴史的には、はつきりしたことがよくわからない。この種の問題に關する研究は、從來、どういふわけか研究對象の埒外に置かれていて、ほとんど顧みられなかつたというのが實情である。實際問題として、中國における佛教思想の流れをこれまでよりもつと詳細にしかも正確に把握し理解しようとするならば、われわれはどうしてもこのような問題を検討究明してみなければならぬ。このような觀點から、この種の問題を検討究明してみることには、文化史的にも思想的にも極めて重要な意義が存すると考えられる。したがつて、ここでは諸大

六朝時代における『維摩經』の研究講説

乘經典のうちでも、とくに中國において最も重要視された經典の一つである『維摩經』を取り上げて、六朝時代におけるこの經典の研究講説の實情を検討してみようとおもう。

二

『維摩經』は、中國においては西曆第三世紀に、吳の支謙、西晉の竺法護、同じく西晉の竺叔蘭によつて三回翻譯された。この經典はインドや中央アジアにおいてよく信奉され、また魏晉の佛教界においては特に重視信奉された。それは、その教義が『般若經』と同じ空觀に基づいていたからである。さらにこの經典は、東晉の初めに揚子江を渡つて貴族社會に佛教を弘めた支敏度によつて、その比較研究がなされた。ついで西曆第五世紀の初めには、この經典は西域の大乗佛敎學者鳩摩羅什によつて重譯され、その訂正がおこなわれて、その門下の俊才によつて盛んに研究され講説された。

ところで、ここでは六朝時代のうちでも、特に鳩摩羅什以後におけ

る『維摩經』の研究講説の實情について検討を加えてみようとおもう。

六朝時代において『維摩經』の研究講説に關係のあつた人物としては、僧肇、僧叡、道生、道融、曇諦、僧導、僧鏡、僧宗、法安、寶亮、法雲、智藏、慧超、慧約、道辯、明徹、寶瓊、警韶、僧範、慧順、靈詢の二十一人の人物が傳えられている。この時代には、實際にこのほかに『維摩經』の研究講説に關係のあつた人物は多數存在していたと考えられるが、少なくとも文献に現われる限りでは、以上のような人物であつた。したがつて、六朝時代における『維摩經』の研究講説は、主としてこのような人物によつてなされたということになる。このようにこの時代において『維摩經』の研究講説に従事した人物はひじょうに限られているが、しかしこれらの人物を通して、われわれはこの時代における『維摩經』の研究講説の實情をかなり明確に理解することができるのである。

ところで、六朝時代には『維摩經』は、中國のどの地域に傳えられて研究され講説されたのであろうか。それは、端的に言えば、長安、洛陽、鄴、彭城、建康、吳興、荊州、晉陽を中心とした地域においてであつたと考えられる。まず、長安（陝西省）において『維摩經』の研究講説に關係のあつた人物としては、僧肇、僧叡、道生、道融、僧導の五人の人物が挙げられる。かれらはみな、西曆四〇一年に長安へやつてきた西域の大乗佛教學者鳩摩羅什の弟子となつた人たちである。これらの五人の人物のうちで、僧肇と僧叡の二人は、鳩摩羅什の歿後、そのまま長安に留まつて『維摩經』の研究講説に従事したが、他の道生、道融、僧導の三人は長安を去つて、それぞれ彭城や建康に

においてこの經典の研究講説をおこなつた。

まず、僧肇は長安の人で、若いころは貧しくてもつばら書籍の筆寫修繕などの仕事によつて生計を立てていた。そのうち老莊などの中國の古典に親しむようになり、ついで吳の支謙譯の『維摩經』を媒介として佛教に歸依した。その後、かれは、姑臧に赴いて、そこに滞在していた西域の佛教學者鳩摩羅什に師事して、西曆四〇一年に師とともに後秦の都長安に迎えられた。こうして僧肇は鳩摩羅什の最初の弟子となり、數千人に上つたといわれる數多くの弟子のうちでも、とくに最も傑出した四人の弟子の一人に數えられるに至つた。かれはとくに「解空第一」と呼ばれて、鳩摩羅什によつて傳えられた龍樹系の佛教を最もよく理解した人であつた。

僧肇には數多くの著述があるが、そのなかに『注維摩詰經』⁽¹⁾十卷がある。現存のこの註釋書がいつごろ誰によつて作られたものであるかといふことは不明であるが、しかし僧肇による『維摩經』の註釋は、恐らく西曆四〇七年ごろになされたのであろうと推定されている。⁽²⁾そうして僧肇は中國において鳩摩羅什譯『維摩經』の註釋書を最初に著わした人であり、その註釋書は人びとにひじょうに尊重されたと傳えられている。いづれにしても、僧肇は、それまでの中國人の佛教の理解が極めて不完全なものであることを指摘して、その不完全な理解を正すために佛典の研究をおこなつて、數多くの著述とともに『維摩經』の註釋書を著わしたのである。こうして、僧肇は、鳩摩羅什が長安へやつてきた西曆四〇一年からかれが亡くなる四一四年までの約十四年間、長安の佛教界で活躍したのであるが、とくに鳩摩羅什によつ

て『維摩經』が翻譯された四〇六年からかれが亡くなるまでの約九年間に、かれの努力によつて『維摩經』が長安の佛教界の人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたことはいうまでもない。

僧叡は、魏郡長樂（河北省冀縣）の人で、十八歳のときに出家して僧賢法師の弟子となつた。かれは二十二歳で博く經論に通じ、泰山の僧朗法師の『放光般若經』の講説を聞いて師に認められ、二十四歳になると、各地を遊歴して佛典の講説をおこなつたが、そのときにその講説を聞く人びとは群を成したという。かれはかねて中國にはまだ禪法が伝えられていないことを深く嘆いていたが、後秦弘始三年（四〇二）十二月、鳩摩羅什が長安にやつて來ると、その六日目から禪に就いての教えを請うた。その結果として翌年の正月には『坐禪三昧經』が譯出された。

その後、僧叡は僧肇らとともに鳩摩羅什の譯經に参加して『法華經』などを譯出した。このとき鳩摩羅什は、竺法護譯の『法華經』の「天見人、人見天」という譯語をみて、これはあまりにも直譯にすぎるといつたところ、僧叡がそれではそれを「人天交接兩得相見」と譯したらどうかといつたので、それをそのまま譯語として採用したといわれる。このことばのうちに、僧叡の學識の豊かさの一面がよくうかがわれる。のちにまた『成實論』の翻譯が完成したときに、僧叡は初めてこれを講説したが、その趣意の説明ぶりはなかなか立派で、それは鳩摩羅什の考えとまったく同じものであつた。それで鳩摩羅什は僧叡と會つて經論を傳譯するならば、眞に恨むところはないといつて、かれを稱讃したと伝えられている。

僧叡は多くの經序を作製したが、そのなかに『維摩經序』⁽⁴⁾がある。かれは弘始八年（四〇六）に『維摩經』が譯出されると、早速、その研究に取り掛かり、かれが歿したと考えられる西曆四二〇年⁽⁵⁾までの十四年間、長安の佛教界において諸大乘經論とともに『維摩經』の研究講説に努めたと考えられる。これについて、塚本善隆博士は、僧叡の傳に維摩經註解のことは見えぬが、彼は什の譯業を助ける前からこの經を研究していた人であり、什譯出づるに及んで感激をこめた序を書いてゐるから、註解の著があつても不思議ではない、と述べておられる。⁽⁶⁾

三

鳩摩羅什の歿後、僧肇や僧叡が長安に留まつて『維摩經』を研究講説したのに對して、長安を去つて、宋の都建康や廬山においてこの經典を研究講説した人としては、道生が擧げられる。道生は、俗姓を魏氏といい、彭城（江蘇省銅山縣）の人で、竺法汰について佛教を學び、のちみずから竺を姓とした。十五歳のときに講座に上り、二十歳のころには、その名は天下に聞こえていたといわれる。最初、建康（南京）の龍光寺に住し、ついで東晉の隆安年中（三九七—四〇一）に廬山に入り、そこに七年間幽棲した。かれは佛教の本質を究めることを最も重要視して、ひろく經論を求めて佛教の研鑽に努めた。當時、鳩摩羅什が長安において經論の翻譯に努めていたが、そのことを知つた道生は、慧叡、慧嚴、および慧觀らとともに長安へ行つて鳩摩羅什について佛教を學んだ。そうしてかれは鳩摩羅什門下の四傑の一人に數えられるほど有名になつたが、鳩摩羅什が亡くなると、東晉の義熙三年⁽⁷⁾

(四〇七)後秦弘始九年)に建康に歸つて青園寺に止まり、そこで佛教の研究講説に従事した。かれは宋の武帝に深く重んじられ、王弘、范泰、顔延之らもまたかれに道を尋ねたといわれる。その後、道生は法顯譯の六卷泥洹經を讀んで、闡提成佛説や頓悟説などの新學説を唱えたために、舊説を墨守する保守的な學徒の譏念に觸れ、ついに建康佛教界の擯斥を受けて、宋の元嘉七年(四三〇)にふたたび廬山に入つた。そうしてかれは元嘉十一年(四三四)十月に廬山の精舎において法席に端坐して歿した。

道生は、かつて後秦の弘始八年(四〇六)に長安において鳩摩羅什の指導のもとに『法華經』や『維摩經』が翻譯されたときに、その譯場に列席したが、同じ譯場に列席した僧肇や僧叡らとともに『維摩經』の註釋をおこなつた。このように道生は鳩摩羅什の門下生たちと一緒に『維摩經』の研究をおこなつたのであるが、しかしかれはかれ獨自の見解を加えたこの經典の註釋書を著わした。そうしてその註釋書は世の人びとに尊重されたと傳えられている⁽⁸⁾。

ところで、この註釋書はいつごろどこで著わされたと考えるべきであらうか。道生は、西曆四〇七年に僧肇によつて『維摩經』の註釋書が著わされたのちに、それを讀んで、さらに自分の見解を加えたこの經典の註釋書を著わした⁽⁹⁾。そうしてかれが長安を去つて南へ歸つたのが同じ西曆四〇七年であつたから、かれが長安においてこの經典の註釋書を著わしたとは考えられない。したがつて、かれは長安においては鳩摩羅什の指導のもとに僧肇や僧叡らとともに『維摩經』の研究をおこなつたが、かれはそこではただその研究に参加しただけであつ

て、西曆四〇七年に長安を去つたのちに、ゆつくりとそのときの研究成果に基づいて獨自の註釋書を著わしたと考えなければならぬ。

道生は、東晉の義熙三年(四〇七)に長安から建康に歸つて、二十數年間そこで生存していたが、その間にかれは『維摩經』の研究講説をおこなつて、建康佛教界の人びとの思想信仰に測り知れない影響を與えたと考えられる。またかれは晩年の約三年間廬山に滞在したが、そこでも、かれによる『維摩經』の思想的影響はかなり強かつたものと考えられる。

また鳩摩羅什の歿後、長安を去つて彭城(江蘇省)において『維摩經』を研究講説した人としては、道融が傳えられている。道融は汲郡林慮(河南省汲縣)の人で、十二歳で出家して最初に外學を學び、『論語』を暗誦して人びとを驚かしたという。かれは三十歳になつて才解英絶し、内外の經書を究めたが、西域の佛教學者鳩摩羅什が長安に滞在していることを聞いて、そこへ行つてかれに教えを請うた。かれは姚興の命によつて逍遙園に入つて、鳩摩羅什の佛典の翻譯事業に参加した。かれはその時にまず鳩摩羅什に『菩薩戒本』の譯出を懇請し、またみづから新たに譯出された『中論』や『法華經』を講説した。

その後、道融は彭城(江蘇省銅山縣)に歸つて、もつぱら佛典の講説に従事したが、道を問う者は千有餘人、門徒は三百人に及んだといふ。こうしてかれは多數の佛典を研究し講説して、それぞれの註釋書を著わした。そうしてそれらの註釋書はいずれも世におこなわれたと傳えられているが、そのなかに『維摩經』の註釋書があつた⁽¹⁰⁾。ところで、この註釋書はいつごろどこで書かれたのであろうか。道融は七十

四歳で歿したと伝えられ、鳩摩羅什が長安へやつてきた西暦四〇一年には三十歳であつたといわれているから、かれは西暦三七一年から四四五年まで生存していたことになる。そうして、もしもかれが鳩摩羅什の歿後、すなわち西暦四〇九年以後ただちに彭城へ歸つて、佛典の研究講説に従事したとするならば、かれは西暦四〇九年から四四五年までの三十六年間そこで佛典の研究講説に従事していたことになる。

鳩摩羅什が後秦の弘始八年（四〇六）に長安において『維摩經』を譯出すると間もなく、かれの弟子たちによつてこの經典の研究講説が開始された。そうして道融は長安において鳩摩羅什の指導のもとにかれの弟子たちと一緒にこの經典を研究して、それを註釋したのであるが、しかし道融自身の註釋書は實際にはそれよりもちに著わされたものと考えられる。すなわち道融は長安において『維摩經』の共同研究をおこなつたのちに彭城へ歸つて、西暦四〇九年から四四五年にかけて他の諸大乘經典とともにこの經典の研究講説を盛んにおこなつてそこでその註釋書を著わしたと⁽¹³⁾考えられる。

さらにまた鳩摩羅什の歿後、長安を去つて宋の都建康において『維摩經』の研究講説に従事した人としては、僧導が擧げられる。僧導は長安の人で、十歳で出家して、初めに師から『觀世音經』を授かり、次いで『法華經』を授かつた。かれは師について『法華經』を學び、晝夜研鑽してほぼその文義に通じた。かれは貧しくて油燭がなく、常に薪を採つてこれに代えたという。かれは十八歳になつて博く書物を讀み、氣幹雄勇にして神機秀發し、僧叡はこれを見て不思議に思つた。かれは秦主姚興の欽仰を受け、また鳩摩羅什の譯場に列して經論

詳定の任に當つた。かれはのちに『成實論』と『三論』の註釋書を著わし、また『空有二諦論』などを著わした。のち宋の武帝が長安を伐ち、關内を掃蕩したときに、僧導は頼まれて武帝の子桂陽公義真を輔佐して、夏王赫連勃勃の難を免かれしめた。武帝はこれに感じて、さらにかれを子姪内外の師として、のちにかれのために壽春（安徽省壽縣）に東山寺を建てた。かれはそこでもつばら經論を講説したが、業を受ける者は千有餘人に及んだと伝えられている。

たまたま西虜によつて佛教が迫害され、その難を避けて僧導のところによつてきた沙門は數百人に及んだという。そこで僧導はかれらに悉く衣食を給し、また死者のためには懇ろに法要を營んだ。

西暦四五四年、孝武帝が即位したときに、僧導は勅命によつて宋の都建康の中興寺に止まつた。かれはまた勅命によつて瓦官寺において『維摩經』を講説したが、そのときには、帝および公卿がごとごとく講席に列したと⁽¹⁴⁾伝えられている。僧導は、晩年に壽春に歸り、その石碣寺で九十六歳で歿したが、かれは鳩摩羅什が長安へやつてきた西暦四〇一年に四十歳であつたとすれば、かれが建康の瓦官寺で『維摩經』を講説した西暦四四四年には九十三歳であつたということになる。

このように西暦五世紀の半ばごろ、諸大乘經典のうちでも、とくに『維摩經』が取り上げられて、宋の都建康において講説されていたということは注目すべきことである。

このほかに宋の首都建康において『維摩經』の研究講説をおこなつた人としては、僧鏡が伝えられている。僧鏡はもとと隴西（甘肅省）

の人で、のち吳（江蘇省）に移住し、出家して吳縣の華山に住した。かれはのちに關隴（陝西甘肅兩省）に入つて、師を尋ねて法を受け、何年か経つて故郷へ歸つた。それからかれは都の健康に止まつて、大いに佛典を講説したが、司空東海の徐湛之はかれの風素を重んじて、かれを一門の師となした。のちかれは姑蘇（江蘇省吳縣）に歸つて、それからまた上虞（浙江省上虞縣）の徐山に行つたが、そのときにかれに踉いて行つた學徒は百有餘人にも及んだという。

このようにして、僧鏡は三吳一帯の人びとを教化したのであるが、その名聲は遠く都にまで響き渡つたといわれる。その後、かれは宋の孝武帝の命によつて都に出て、鐘山の定林下寺に止まつた。かれはここではもつぱら佛典の研究講説に従事して、『法華』『泥洹』などの諸大乘經典とともに『維摩經』の註釋書を著わし、また『毘曇玄論』などを著わした。⁽¹⁶⁾ そうしてかれは宋の元徽年間（四七三—四七七）に六十七歳で歿した。

ところで、僧鏡が鐘山の定林下寺に止まつて、佛典を研究講説して、諸大乘經典とともに『維摩經』の註釋書を著わしたのは、いったいいつごろのことであつたのであろうか。僧鏡は、すでに述べたように、孝武帝（四五四—四六四在位）の命によつて都に出て鐘山の定林下寺に止まつたことが明らかであるから、かれが定林下寺において佛典の研究講説を開始したのは、少なくとも西曆四五四年以後のことである。したがつて、かれによつて『維摩經』の註釋書が著わされたのは、孝武帝が即位した西曆四五四年から、かれが亡くなつたと伝えられている元徽年間（四七三—四七七）に至るまでの約二十年間における

いずれかの時期であつたことになる。しかしながら、鐘山の定林下寺におけるかれの『維摩經』の註釋は、この二十年間のうちのかなり早い時期におこなわれたにちがいない。僧鏡が鐘山の定林下寺において『維摩經』の註釋書を著わした時期は、恐らく西曆四六〇年代、すなわちかれが五十二—六十一歳位のころであつたと考えて大過ないであらう。

また宋代の吳興において『維摩經』の研究講説に關係のあつた人としては、曇詒が伝えられている。曇詒は俗姓を康といい、先祖は康居國の人で、後漢の靈帝のときに中國にやつて來て、獻帝の末に戰亂に會つて吳興（浙江省吳興縣）に移り、かれの父は冀州の別駕であつた。

かれは十歳で出家して、父と一緒に各地を遊歴し、鳩摩羅什の弟子の僧習に會つたりしたが、晩年には吳（江蘇省吳縣）の虎丘山に入つて、『禮』『易』『春秋』および『法華』『大品』などの諸大乘經典とともに『維摩經』を講説した。⁽¹⁷⁾ そののち、かれは吳興に歸り、故章の崑崙山に入つて、二十餘年を過ごし、宋の元嘉の末年（四五三）に六十餘歳で歿したと伝えられている。

このように曇詒は、晩年に江蘇省吳縣の近くの虎丘山に入つて、そこで『維摩經』を講説したことが知られるが、しかしかれによるこの經典の講説は、そののちかれが吳興に歸つて、故章の崑崙山に入つてからもおこなわれたにちがいない。したがつて、曇詒によるこの經典の講説は、少なくともかれが亡くなつた西曆五世紀の半ばごろまでは、江蘇省の南端に位する吳の虎丘山および浙江省の北端に位する吳興を中心とした地域においておこなわれたと考えられる。

またこの時代に北シナにおいて『維摩經』を研究講説した人としては、道辯が挙げられる。道辯は、俗姓を田氏といい、范陽（河北省涿縣）の人である。かれは北魏で偽經が盛んにおこなわれているのを嘆いて、多數の偽經を集めて、それらを焚き、人びとに佛教を正しく理解してもらうために、多數の佛典の註釋書を著わした。そのなかに『維摩經』の註釋書がみられる。⁽¹⁸⁾ この註釋書は西曆五世紀末に洛陽において著わされたと考えられる。

また『維摩經』は北魏の佛教界では特に重視信奉されていた。北魏の宣武帝は、常に名僧學者を宮廷に集めてこの經典を講説していたと傳えられている。この經典に説かれている維摩居士と文殊菩薩との法論の場面は、山西省の雲岡の石窟に少なからず刻まれており、また河南省の龍門の石窟にもその佛龕の入口の上部の意匠として最も多く刻まれている。

四

つぎに齊の首都建康において『維摩經』を研究講説した人物としては、僧宗、法安、寶亮、法雲、智藏、慧約が傳えられている。まず僧宗は、俗姓を嚴といい、もともと雍州憑望（陝西省大荔縣）の人で、晉氏の喪亂のときに、その先祖は秦郡（江蘇省六合縣）に移住した。かれは九歳で出家して、法安の弟子となり、また曇弼・曇濟二法師について佛道を修行し、『涅槃』『勝鬘』などの諸大乘經典とともに『維摩經』を善くした。かれが佛典を講説する度に、その聴講者は一千人以上にも及んだと傳えられている。⁽²⁰⁾

北魏の孝文帝（四七一—四九九）は遠く僧宗の名聲を聞いて、しばしば書簡をもつて、かれに佛典の開講を依頼したが、齊の武帝（四八二—四九三）はそれを許さなかつたという。僧宗はまた武帝の命によつて『涅槃』『勝鬘』などの諸大乘經典を講説し、また『維摩經』を講説したが、それらの講説は、それぞれ百遍に及んだという。かれは齊の建武三年（四九六）に太昌寺において五十九歳で歿した。

これによつて、僧宗がいかに『維摩經』を熱心に研究し講説していたかということがわかるが、同時にまた西曆四八〇年代の齊の都建康において『維摩經』がいかに盛んに研究され講説されていたかということもよくわかる。

法安は、俗姓を畢といい、東平（山東省東平縣）の人で、魏の司隸校尉軌の後裔である。かれは七歳で出家して、二十歳のころすでに都で有名になり、三十歳になると、もつぱら法匠の任に當つた。その後、かれは各地を遊歴して、齊の永明中（四八三—四九三）に首都建康に歸つて、中寺に止まり、そこで『涅槃』『十地』『成實』などの諸經論とともに『維摩經』を講説した。⁽²²⁾ かれはまた『維摩經』の註釋書を著わしたが、永泰元年（四九八）に中寺において四十五歳で歿した。⁽²³⁾

このように、法安は、齊の永明年間（四八三—四九三）に首都建康の中寺において『維摩經』を研究し講説して、その註釋書を著わしたことが知られる。

寶亮は、俗姓を徐氏といい、その先祖は東莞（山東省莒縣）の貴族で、晉が敗れたときには東萊の愷縣（山東省黃縣）に避難した。かれは十二歳で出家して、當時名聲の高かつた青州（山東省益都縣）の道明

法師に師事して、二十一歳のときに宋の都建康に出て中興寺に止まつた。かれは人びとから尊敬され、ことに熱心な佛教信者であつた齊の竟陵文宣王はみずからかれのところに行つて、教えを請うてかれを接足恭禮したとさえ伝えられている。

その後、實亮は鐘山の靈味寺に移つて、『涅槃』『法華』『勝鬘』『十地』など多數の佛典を講説したのであるが、そこでは『維摩經』は二十回も講説されたといふ。かれには三千人以上の弟子があり、常に師事する弟子は數百人に及んだといふ。かれは梁の天監八年（五〇九）に靈味寺において六十六歳で歿した。

ところで、實亮が鐘山の靈味寺において『維摩經』を講説したのは、いつごろのことであつたのであらうか。實亮が靈味寺に入つて佛典を講説したのは、齊の竟陵文宣王に會つたのちのことであるから、それは齊代のことになる。かれがかりに齊の永明八年（四九〇）に靈味寺に入つたとするならば、かれが靈味寺で歿したのは梁の天監八年（五〇九）であつたから、かれは靈味寺に約二十年間住してゐたことになる。したがつて、實亮はこの二十年間に靈味寺において『維摩經』を講説したと考へて大過ないであらう。

法雲は、俗姓を周氏といひ、義興陽羨（江蘇省宜興縣）の人で、七歳で出家して師とともに建康の莊嚴寺に住し、僧成、玄趣、實亮の弟子となつた。かれは十三歳になつて初めて佛教を學んだが、太昌寺の僧宗や莊嚴寺の僧達はともにかれを褒め稱えたといふ。またかれが三十歳になつて、齊の建武四年（四九七）の夏、初めて妙音寺において『法華經』と『淨名經』を講説したときには、聽講者は堂に滿ち溢れたと

傳えられている。

當時、齊の都建康では『淨名經』、すなわち『維摩經』の研究講説が極めて盛んであつたが、ただここで注意すべきことは、法雲が初めて佛典を講説したときに、多數の諸大乘經典のなかから特に『維摩經』を選んで、それを講説したといふことである。これは、とりもなおさず、法雲が諸大乘經典のなかでも特に『維摩經』の思想に傾倒し、その講説を聞く人びともまたその思想に大きな關心を示していたといふ事實を物語っているにほかならない。

法雲は梁の大通三年（五二九）に六十三歳で歿したが、かれは齊の建武四年（四九七）に初めて『維摩經』を講説してから、かれが歿するまでの約三十年間に首都建康においてたびたびこの經典を講説したにちがいない。

智藏は、俗姓を顧氏といひ、吳郡吳（江蘇省吳縣）の人で、十六歳のときに宋の明帝に代わつて出家した。かれは宋の泰始六年（四七〇）に勅命によつて建康の興皇寺に住し、上定林寺の僧遠や僧祐に師事し、また天安寺の弘宗にも師事した。さらに當時すでに天下に名聲を博していた僧柔、慧次の二師について佛教を學んで、それに精通したと傳えられている。齊の文憲王公は智藏を安居に招いて、かれと早く知り合はなかつたことを歎いたといわれる。太宰文宣王は大いに佛教を紹隆し、『淨名經』を講説するために、學解の僧を二十人ほど招集した。智藏はそのなかに選ばれて、年臘が最少のために末坐に坐つていたけれども、佛教の意義をよく理解していた點ではかれの右に出る者はいなかつた。

ともかく、これによつて、齊の都建康の佛教界においては、諸大乘經典のうちでも特に『維摩經』が取り上げられて、研究され講説されていた事實がよくわかる。

慧約は、俗姓を婁といい、東陽烏場（浙江省金華縣）の人で、七歳で『孝經』や『論語』などを讀んだ。かれは十二歳になつて初めて剡（浙江省嵊縣）に遊び、あまねく塔廟を巡拜して、多數の佛典の奧義を究めたので、當時の人びとから「少くして妙理に達した婁居士」と呼ばれた。かれは宋の泰始四年（四六八）十七歳のときに上虞（浙江省上虞縣）の東山寺において出家し、南林寺の沙門慧靜に師事した。かれはまた師慧靜について剡の梵居寺において佛道の修行に勵んだ。

齊の太宰文簡公楮淵や太尉文憲公王儉は、ともに熱烈な佛教信者であつて、佛教の宣布に努めた人びとであるが、かれらの希望によつて諸大乘經典が講説されたときには、やはり『法華』『大品』『勝鬘』などの諸大乘經典とともに『維摩經』が選ばれて講説された。⁽²⁷⁾ここには齊の都建康を中心として一般の知識階級によつて『維摩經』がひじように尊重されて、よく講説されていた事實の一端がうかがわれる。

五

梁の時代には『維摩經』の研究講説は、首都建康のほかは荊州（湖北省）を中心とした地域においておこなわれたと考えられる。この時代に荊州においてこの經典を研究講説した人としては、明徹が挙げられる。明徹は、俗姓を夏といい、吳郡錢唐（浙江省杭州）の人で、六歳で父を失つて出家を願ひ、上虞（浙江省上虞縣）の王園寺に住した。

齊の永明十年（四九二）、竟陵王は沙門僧祐を請うて、三吳において律を講ぜしめた。このとき明徹は僧祐について『十誦律』を學び、のちかれに従つて都に出て、建初寺に住した。

齊の建武年間（四九四—四九七）、明徹はもつぱら佛典の研究に従事して、眞實の師を求めて各地を歴訪した。またこのころ、齊の太傅肅顯は、明徹を崇敬していたが、荊州（湖北省江陵縣）を領有するに及んで、かれとともに七澤に遊び、かれを内第に招いて『淨名經』を講説せしめた。⁽²⁸⁾これによつて、齊の建武年間、すなわち西曆四九〇年代の半ばごろに荊州において『維摩經』が講説されたことが知られる。

その後、梁の天監の初め（五〇二）に、明徹は始めて都に歸り、普通三年（五二三）に建初寺で歿するまでの約二十年間、主として佛典の研究講説に従事したが、この間にも、かれが首都建康においてたびたび『維摩經』を講説したことは疑いない。

またこの時代に首都建康において『維摩經』を研究講説した人としては、慧超が伝えられている。慧超は、俗姓を廉氏といい、趙郡陽平（河北省趙州）の人で、中原の喪亂のときに鐘離の朝哥縣（安徽省鳳陽縣）に避難した。かれは八歳で出家して、臨菑縣（山東省青州）の建安寺の沙門慧通に師事した。のちかれは江南に遊んで南潤寺に住した。梁の武帝は、天監年中（五〇二—五一九）に慧超を家僧としてかれに格別の禮遇を與え、またかれに請うて慧輪殿において『淨名經』を講説せしめた。⁽²⁹⁾

梁の武帝が熱烈な佛教信者であつたことは有名な事實であるが、かれは諸大乘經典のうちでも特に『淨名經』に深い關心を持っていた。

それは、かれが多数の佛典のうちから特に『淨名經』を選んで、それを慧超に講説させたという事實によつても確かめられる。

これはまた梁の時代に首都建康において『淨名經』がひじように重要視されていたという事實を物語っているにほかならない。

このように、慧超は、梁の天監年間に武帝の命によつて慧輪殿において『淨名經』を講説したことが知られるが、かれはまた普通七年（五二六）に亡くなるまでやはり首都建康において一般の人びとのためにもこの經典を講説したに相違ないと思われる。

六

陳の時代になると、『維摩經』の研究講説は、もつぱら首都建康を中心とした地域においておこなわれるようになったが、この地域においてこの經典の研究講説に關係のあつた人物としては、寶瓊と警韶が傳えられている。寶瓊は、俗姓を徐氏といい、もともと東莞（山東省莒縣）の人で、のち戰亂を避けて、毘陵の曲阿縣（江蘇省丹陽縣）に移住した。かれは綺年にして沙門法通に師事し、十五歳を過ぎたころに光宅寺の法雲について教えを受けようと思つたこともあつた。二十歳のころになると、かれはよく佛典を講説し、熱烈な佛教信者であつた梁の武帝に招かれて、壽光殿に入つて佛典を講説したが、のち故郷の建安寺に歸つた。そののち寶瓊は、ふたたび請われて梁の都建康に出て『成實』『涅槃』などの諸經論とともに『維摩經』の研究講説をおこなつた。

このように、寶瓊は佛典の研究講説をおこなつて、多数の註釋書を

著わしたが、そのなかに『維摩經』の註釋書⁽³⁰⁾がある。ところで、この註釋書はいつどこで著わされたのであろうか。寶瓊はその生涯の大部分を首都建康で過ごしているので、かれが『維摩經』の註釋書をそこで書いたことはまず間違いないと思われる。時代はかれが五十四歳のときに梁代から陳代に變つていいるが、かれによる『維摩經』の註釋はかれが五十四歳のとき、すなわ梁代までになされたと考えられる。そうしてかれは八十一歳の高齢で亡くなっているから、陳代には二十七年間生存していたことになる。ともかく、かれは梁代においてすでに『維摩經』の研究を完成してその註釋書を著わし、五十四歳以後、すなわち陳代に入つてからは首都建康において他の諸大乘經典とともに『維摩經』の講説をおこなつて、人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

警韶は、俗姓を顔氏といい、會稽上虞（浙江省上虞縣）の人で、幼少のころ叔父の僧廣に師事した。かれは初め梁の都建康に出て佛典の講説を聞いたりしたが、二十歳になると、故郷に歸つて戒を受け、嚴格な修行生活に勵んだ。その後、かれは人に勧められてふたたび都に出たが、かれがそこで『大品經』を講説したときには、聽講者は路上に溢れたといわれる。ときにはかれは二十三歳であつた。

陳の天嘉四年（五六三）、警韶は、會稽の慧藻、同泰の道倫ら二百餘人の懇請に應じて首都建康の白馬寺において佛典の講説をおこなつた。このかれによる佛典の講説はその後も白馬寺において長くおこなわれたという。

このように、警韶は佛典の講説を盛んにおこなつたが、『維摩經』

の講説も盛んにおこなつたと傳えられている。⁽³¹⁾ところで、警韶による『維摩經』の講説はいつごろおこなわれたのであろうか。警韶は年四十にして、長く講説に就かんことを願つた⁽³²⁾と傳えられているから、かれがもつばら佛典の講説に従事したのは、かれが七十六歳で亡くなるまでの三十六年間であつたことになる。したがつて、かれが『維摩經』を講説したのもこの三十六年間ににおけるいずれかの時期であつたと考えられる。しかしながら、かれによる『維摩經』の講説は、この三十六年間のうちのかなり早い時期におこなわれたに相違ないと思われる。

また警韶は、陳の天嘉四年（五六三）に建康の白馬寺に招かれて佛典の講説をおこない、その後もそこで長く講説をおこなつたと傳えられているから、かれが天嘉四年、すなわち西暦五六三年以後にも『維摩經』の講説をおこなつたことは間違いない。

またこれとほぼ同じ時代に北シナにおいて『維摩經』の研究講説をおこなつた人としては、僧範、慧順、靈詢が傳えられている。このうち僧範と慧順は東魏北齊の鄴都においてこの經典を研究講説したが、靈詢は晉陽を中心とした地域においてこの經典を研究講説したと考えられる。僧範は、俗姓を李氏といい、平郷（河北省平郷縣）の人で、二十九歳のとき『涅槃經』の講説を聞いて、佛教のすばらしさを知り、ついに鄴城（河南省臨漳縣）の僧に投じて始めて出家した。かれは最初に『涅槃經』を學んで、その眞實の意義を理解して、都會の雜沓をさけて山藪に隱栖したが、のち洛陽に出て『法華經』や『華嚴經』などの講説を聞き、佛典の理解に努めた。

その後、僧範は、膠州（山東省膠縣）の刺史杜弼という人の招請によつて、鄴の顯義寺において『華嚴經』を講説した。かれはまた『華嚴』『十地』『地持』『勝鬘』などの諸大乘經典とともに『維摩經』を講説して、それぞれの註釋書を著わしたと傳えられている。⁽³³⁾ところで、僧範はこの『維摩經』の註釋書をいつごろどこで著わしたのであろうか。それは東魏北齊の鄴都においてであつたと考えられる。かれは二十九歳で出家して、一時山林に隱棲したこともあつたが、洛陽で佛教の研究に従事したのちには、主として東魏北齊の鄴都の佛教界において活躍した。かれが東魏北齊の鄴都の佛教界において活躍したのは、北魏が東西兩魏に分裂して鄴が東魏の首都になつた西暦五三四年からかれが鄴東の大覺寺において八十歳で亡くなつた西暦五五五年に至るまでの約二十年間である。東魏北齊の鄴都の佛教界では、佛教は隆盛を極め、諸大乘經典のうちでも、とくに『維摩經』の研究講説が盛んであつたから、僧範がこの時代に鄴都でこの經典の註釋書を著わしたことは當然のことといわなければならない。

慧順は、俗姓を崔といい、齊（山東省臨淄縣）の人で、熱烈な佛教信者侍中崔光の弟であつた。かれは二十五歳のとき洛陽に行つて慧光律師に投じて出家した。北魏が西暦五三四年に東西兩魏に分裂して相對峙するに至ると、これまで北魏の佛教都市として繁榮を誇つた洛陽は、急速に衰微していつた。そうして洛陽は東西兩魏軍が爭奪する戰場となり、洛陽在住の多數の名僧學者とともに慧順も東魏の首都鄴に移住した。東魏北齊の首都鄴では、慧順は『十地』『地持』『華嚴』などの諸大乘經典とともに『維摩經』の研究講説をおこなつて、それ

ぞれの註釋書を著わした⁽³⁴⁾。かれがひとたび佛典の講説をおこなうと、かならず千人以上の聴衆が集まつたと伝えられている。これによつても、かれの佛典の講説がいかにすぐれたものであつたかということがよくわかる。かれは北齊鄴都の總持寺において七十二歳で歿したが、かれはそこで歿するまで東魏北齊の鄴都の佛教界において他の諸大乘經典とともに『維摩經』を講説して、人びとの思想信仰に大きな影響を與えたと考えられる。

靈詢は、俗姓を傅氏といい、漁陽（河北省薊縣）の人で、早くから出家して、『成實論』や『涅槃經』を學んで、佛教の眞理を究めた。その後、かれは慧光律師を崇敬し、日夜研鑽して十有餘年に及び、諸大乘經典のなかでも特に『維摩經』を研究して、その註釋書を著わした⁽³⁵⁾。その後、かれは各地を遊歴して、北魏の末（五三三）に并州の僧統となり、北齊の初め（五五〇）六十九歳で晉陽（山西省太原縣）で歿した。

このように、靈詢は、并州の僧統となり山西省の中部に位する晉陽に滞在していたから、かれがこの地方の人びとに『維摩經』の思想的影響を與えたことは疑いない。そうしてかれは北齊の初めまで生存していたと伝えられているから、かれが、この地方の人びとにこの經典の思想的影響を及ぼしたのは、少なくとも西曆五五〇年までであつたと考えられる。

七

以上に検討した結果からも明らかなように、『維摩經』は、六朝時

代においては、陝西省のやや南部に位する長安、河南省の西北部に位する洛陽、同じく河南省の北端に位する鄴、江蘇省の西北部に位する彭城、同じく江蘇省の南西部に位する建康、浙江省の北端に位する吳興、湖北省の南部に位する荊州、および山西省のほぼ中部に位する晉陽において研究され講説されて、人びとの思想信仰に大きな影響を及ぼしたと考えられる。しかしながら、この時代には特に『維摩經』に關係のあつた人物の多くが、建康に在任して、諸大乘經典とともにこの經典の研究講説に従事していたから、この經典は、この時代には少なくとも宋・齊・梁・陳の首都建康を中心とした地域において最もよく研究され講説されて、この地域一帯の人びとの思想信仰に大きな影響を與えたと考えられる。

- 1 大正藏、三八卷、三二七頁上〜四一九頁下。
- 2 塚本善隆編『肇論研究』一四七頁。
- 3 初關中僧肇、始注、維摩、世咸翫味。生乃更發深旨、顯暢新典、及諸經義疏、世皆賞焉（『高僧傳』卷七、竺道生傳、大正藏、五〇卷、三六七頁上）。また僧肇の『維摩經』の註釋については『高僧傳』卷六の僧肇傳に次のように記されている。すなわち、肇後又、著不眞空論、物不遷論等、并注、維摩、及製諸經論序。並傳於世。什之亡後、追悼永住、翹思彌厲、及著涅槃無名論（大正藏、五〇卷、三六五頁中下）。
- 4 著大智論、十二門論、中論等諸序、并著大小品、法華、維摩、思益、自在王、禪經等序、皆傳於世（『高僧傳』卷六、僧叡傳、大正藏、五〇卷、三六四頁中）。「毘摩羅詰提經義疏序」（『出三藏記集』卷八、大正藏、五五卷、五八頁下〜五九頁上）。
- 5 宇井伯壽著『釋道安研究』四八頁。僧叡は鳩摩羅什が長安へやつて來た西曆四〇一年に四十八歳であつたとすれば、かれが歿した六十七歳のとき

は西暦四二〇年であつたことになる。

6 塚本善隆編『肇論研究』一四六頁。

7 道生は東晉の義熙五年（四〇九）に長安から建康へ歸つたという説もある。

8 道生の著わした『維摩經』の註釋書が當時の人のびとにいかにか尊重されてゐたかということは、『世皆實焉』（『高僧傳』卷七、竺道生傳、大正藏、五〇卷、三六七頁上）という表現のうちによく示されてゐる。

9 道生の『維摩經』の註釋書について、塚本善隆博士は、僧肇卒後二十年も生存した道生（四三三卒）は、肇の註解が行はれ自らも之を讀んだ後に、更に自らの創見を加えた註解を著はし、共に南北朝に貴ばれたのであると述べておられる（『肇論研究』一四六頁）。

10 所著、法華、大品、金光明、十地、維摩等義疏、並行於世矣（『高僧傳』卷六、道融傳、大正藏、五〇卷、三六三頁下）。

11 字井伯壽著『釋道安研究』四八頁。

12 これは『注維摩經』十卷のなかの經の本文に鳩摩羅什、僧肇、道生および道融の註が入れてあることによつて知られる。ただしこの註釋書における道融の註はほんのわずかである。

13 融後還彭城、常講說相續（『高僧傳』卷六、道融傳、大正藏、五〇卷、三六三頁下）。

14 導、以孝建之初、三綱更始、感事懷惜、悲不自勝、帝亦哽咽良久。即勅於瓦官寺、開講維摩、帝親臨幸、公卿必集（『高僧傳』卷七、僧導傳、大正藏、五〇卷、三七一頁中）。

15 字井伯壽著『釋道安研究』四八頁。

16 宋世祖、藉其風素、勅出京師、止定林下寺。頗建法聚、聽衆雲集。著法華、維摩、泥洹義疏、并毘曇玄論。區別義類、有條貫焉（『高僧傳』卷七、僧鏡傳、大正藏、五〇卷、三七三頁中下）。

17 晚入吳虎丘寺、講禮、易、春秋、各七遍。法華、大品、維摩、各十五遍（『高僧傳』卷七、曇諦傳、大正藏、五〇卷、三七一頁上）。

18 注維摩、勝鬘、金剛般若、小乘義章六卷、大乘義五十章、及申玄照等、

行世（『續高僧傳』卷六、道辯傳、大正藏、五〇卷、四七一頁下）。

19 （永平二年十一月）帝於式乾殿、爲諸僧朝臣、講維摩經（『魏書』世宗紀）。

20 晚又受道於斌濟、善大涅槃、及勝鬘、維摩等。每至講說、聽者將近千餘。妙辯不窮。應變無盡（『高僧傳』卷八、僧宗傳、大正藏、五〇卷、三七九頁下）。

21 齊世祖、不許外出。宗講涅槃、維摩、勝鬘等、近習百遍（『高僧傳』卷八、僧宗傳、大正藏、五〇卷、三七九頁下）。

22 永明中、還都止中寺、講涅槃、維摩、十地、成實論、相繼不絕（『高僧傳』卷八、法安傳、大正藏、五〇卷、三八〇頁上）。

23 著淨名、十地義疏、并僧傳五卷（『高僧傳』卷八、法安傳、大正藏、五〇卷、三八〇頁上）。

24 後移、憩靈味寺。於是、續講衆經、盛于京邑。講大涅槃、凡八十四遍、

成實論十四遍、勝鬘四十二遍、維摩二十遍、其大小品十遍、法華、十地、優婆塞戒、無量壽、首楞嚴、遺教、彌勒下生等、皆近十遍（『高僧傳』卷八、寶亮傳、大正藏、五〇卷、三八一頁下）。

25 （法雲）……及年登三十、建武四年夏、初於妙音寺、開法華・淨名二經、序正條源、群分名類。學徒海濤、四衆盈堂（『續高僧傳』卷五、法雲傳、大正藏、五〇卷、四六四頁上）。

26 齊太尉文憲王公、深懷欽悅、爰請安居、常數相知之晚。太宰文宣王、建立正典、紹隆釋教、將講淨名、選窮上首。乃招集精解、二十餘僧、探授符策、乃得於藏。年臘最小、獨居末坐、敷述義理、罔或抗衡。道俗翕然、彌崇高譽（『續高僧傳』卷五、智藏傳、大正藏、五〇卷、四六五頁下）。

27 齊太宰文簡公褚淵、大尉文憲公王儉、佐命一期、功高百代、欽風味道、共弘法教。淵嘗講、淨名、勝鬘、儉亦請、開法花、大品（『續高僧傳』卷六、慧約傳、大正藏、五〇卷、四六九頁上）。

28 齊太傅蕭穎、深相欽屬。及領荊州、携遊七澤、請於內第、開講淨名（『續高僧傳』卷六、明微傳、大正藏、五〇卷、四七三頁中）。

- 29 天監年中……帝又請、於慧輪殿、講淨名經。上臨聽覽（『續高僧傳』卷六、慧超傳、大正藏、五〇卷、四六八頁上）。
- 30 法花、維摩等經、並著文疏。故不備載、布在州邑（『續高僧傳』卷七、寶瓊傳、大正藏、五〇卷、四七九頁下）。
- 31 維摩、天王、仁王等經、遍敷繁亂、不紀廣叙（『續高僧傳』卷七、警韶傳、大正藏、五〇卷、四八〇頁中）。
- 32 韶乃、願年四十、長就講說（『續高僧傳』卷七、警韶傳、大正藏、五〇卷、四八〇頁上）。
- 33 講華嚴、十地、地持、維摩、勝鬘、各有疏記（『續高僧傳』卷八、僧範傳、大正藏、五〇卷、四八三頁下）。
- 34 慧順……講十地、地持、華嚴、維摩、並立疏記（『續高僧傳』卷八、慧順傳、大正藏、五〇卷、四八四頁中）。
- 35 雖博知群籍、而擅出維摩、兼有疏記（『續高僧傳』卷八、靈詢傳、大正藏、五〇卷、四八四頁下）。

補記 六朝時代には『維摩經』を研究講説した人物のほかに、この經典を讀誦した人物が存在するが、それらの人物については、ここでは紙數の關係で省略した。しかしながら、少なくともこの時代に『維摩經』の研究講説に關係のあつた人物は、ここに一人残らず取り上げて検討を加えた。